

『ずっと初心』

毎年発行される薬についての解説と便覧の本で「今日の治療薬」という本があります。その本の表紙の下についてあるもの（業界用語では腰巻といつてさうです）に『ずっと初心』と書かれています。今回は看護師としての私の初心、看護の原点に振り返って書いてみたいと思います。

私が看護師になって就職した病院で、看護部長からいただいた最初の言葉は、一つ目が「私達看護師は生活の支援者です。私達は科学的根拠に基づいた看護を実践しなければいけない」、そして二つ目が「自分なりの看護観を持ちなさい」と事でした。

最初は科学的根拠も看護観も難しくよくわからない。まずは看護の仕事覚えて患者さんに安全に安楽に看護を実践できることと思いつながらのスタートでした。看護体制は、プライマリナーシングとチームナーシングを合わせた方式でした。プライマリナーシングとは患者様の入院から退院までを一人の看護師が担当する看護方式です。そしてチームナーシングとは一つの病棟を2つ以上のチームに分けて各チームリーダーのもとチーム単位で患者様を受け持つ方式です。私が最初に受けた患者さんは女性で脳梗塞、

左麻痺の方でした。初めて患者さんを受け持てるのが嬉しくて何でもしてあげたいと思い、看護計画を立案し、実施していきました。一定期間の後、チームでカンファレンスを実施して計画の評価をしていくのですが、その際に「何でも手を貸してしまつては患者さんの自立を妨げていることになる」と言われました。「出来ないことに



は勿論援助が必要、しかし自立に向けるためにどうするかを考えなければならぬ。その方が退院させることがゴールではなく、その先につながる生活をイメージして自立につなげていかなければならない。そのためにもこの支援を考えることが大事」という結果でした。

二人目の受け持ちする患者さんは、転移性脳腫瘍で終末期の方でした。痛みのコントロール目的での入院でした。しかし、その方は痛くても我慢して、なるべく薬を使いたくないと言っています。どう

してなのか解らず薬の時間を定時として使用することになりました。その方は仕方なく痛み止めの座薬や内服をして下さいました。痛みはなくなりましたが眠る時間が長くなりまして。そんなある時、旦那様から「少しでも残された時間を痛くても眠らないで話をしていたかったみたいなんだよね」と言われました。痛みをとることも大切だけれど残された時間を自分らしく過ごしたいということ、その方の願いだった、ということに気付いていなかったのです。そして旦那様の言葉でやっとなでカンファレンスを行い、ご本人と御家族と話し合つて「家族が来る前に痛みが消失してお話ができる時間を持てる」ということを看護計画としました。しかし上手にコントロールはできませんでした。技術も知識も未熟な私が受け持つことで、その患者さんや家族に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。お亡くなりになる前にそ

の方が私に「受け持ちをしてくれてありがと。大変な患者だったでしょ。わがまま言つてごめんね。これからたくさん経験して悩んで苦しんで、そして頑張つて良い看護師さんになつてね。人の気持ちや心の痛みがわかる看護師さんになつてね」と言葉を送りました。

看護は採血や点滴や看護技術だけが上手くできれば良いということではない。出来ないことは何でも手を貸し、優しくしなければいけないことでもない。21歳から始めたこの仕事ももう32年が過ぎます。新人で憧れの先輩の背中を追い続けていた私が今では病院長よりも年上なんて…。今となって、あの時にいただいた言葉のような看護師になれたかと言えばまだまだ途中です。

長く務めるほど味わいが増すこの仕事の奥深い魅力にはまりながら、仕事を続けていく以上「看護とは何か、何のために看護をするのか」初心、原点に立ち返り残りこれからも悩んで、苦しんで、そして患者様に感謝して看護師を続けていこうと思つています。

（文責 看護師長 佐々木千代子）

